

Withコロナとこれからのスポーツ観戦

通路を抜けた先に、ドームを埋める観客が目飛び込んできた。それだけで、試合前の高揚感が伝播する。やっぱりスポーツは会場で観るのがいい。きびきび働くスタッフや草のにおい、フィールドに落ちる秋の日差し。すべてが輝いて見えた。

10月23日、ラグビーの国際試合（テストマッチ）日本ーオーストラリア戦が大分市の昭和電工ドームであった。新型コロナウイルスの影響で、ラグビーワールドカップ以降、2年ぶりとなる県内での大規模スポーツイベント。感染対策で観客が半数に制限された昭和電工ドーム大分（大分市）は、制限内の満席に近い1万7千人で埋まった。

県外からの観客も多く来場していたという。JR大分駅には代表のジャージーを着たファンがあふれた。チケットを手に、移動の臨時運行バスに乗るのも2年ぶり。W杯の時にはなかった検温と、バスは密を避けるために予約制と乗車定員が設けられていた。多くの観客がバスを利用したが、ボランティアの活躍で混乱なく会場に移動した。

「一度経験したことがある」は強い。例えばこれが、初めて国際級の試合を開催するとなったら、このようにスムーズにはいかなかっただろう。W杯の時に官民挙げて受け入れ態勢を整え、成功させた経験があるからこそ、次で応用が利く。W杯も、感染症対策の経験も、地域に残っていくのだと感じた。

試合も素晴らしかった。日本は世界ランク3位のワラビーズに善戦したが、23-32で敗れた。声援ではなく、配布されたハリセンと拍手で選手たちのプレーをたたえた。

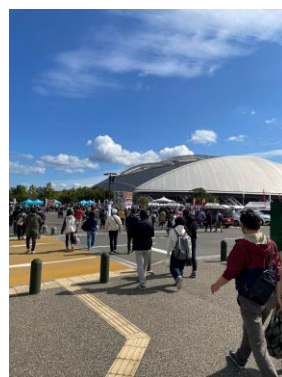
以前のように、お酒を片手に大声を出して会場で応援するような観戦はまだしばらくできないだろう。私たち市民がイベントに行くには、「これを逃すともうない」とか、「どうしても見たい」とか、背中を押してくれる理由がいるような気がする。しかし、その一瞬でしか生まれない真剣勝負には、理由たる十分な魅力があると思った。

大分県内にもプロスポーツチームがいくつかある。地域でスポーツを観戦できる幸せがこれからも続くように、感染対策をしながら大いに応援したい。

大分合同新聞社 ビジネスサポート部マネージャー 渡部さおり



満席に近い昭和電工ドーム大分場内



チケットを手に集まる観客